
捕 獲

工藤るう子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
捕獲

【Nコード】
N0034W

【作者名】
工藤るう子

【あらすじ】
夏休みに出会った青年と少年の話。ホラー風味。（再録）

夏の盛りの暑い日ざしも、蟬の声さえも、そこには届いていないかの錯覚があった。

茶色と白がシックなコントラストを見せるリビングに、制服姿の理人は立ち尽くしていた。

白い開襟シャツの胸ポケットには彼の通う高校の紋章が刺繍されている。

握りしめた拳が、小刻みに震える。

打ち下ろす先を選べなかった拳である。

ゆったりとしたソファに腰を下ろしたまま、青年が理人を見上げていた。

日の光が射し込んでいるというのに薄暗く感じるのは何故なのか。

目の前にあるのは、白皙の美貌である。印象的な琥珀の瞳が細められ、滴る血のように赤いくちびるの端がじわりともたげられる。

理人の背中を、冷たいものが流れ落ちた。

「なんでっ」

吐き捨てるように、理人が叫ぶ。

「なんであんなことっ」

抑えても抑えきれずに、声が、震える。

「わかりませんか」

理人とは対照的に玲瓏と涼やかな声音が、揶揄するように薄暗い室内に響いた。

本当は知っているだろうと、琥珀のまなざしが理人の鳶色の瞳を覗き込んだ。

「っ。わかるわけないだろ」

先ほどの勢いをなくした声が、力なく転がり落ちる。

ゆらりと、白皙の青年が立ち上がり、理人の両肩に手を置いた。

そうして、上半身をかがめて彼の顔の至近距離で、

「うそつき」

そう、ゆっくりとささやいた。

「君は僕の気持ちを知っていましたよ。だから、彼女を僕に紹介し

たんです」

ぬけぬけと…………。

たしかに、そう聞こえた最後のひとことに、理人の全身が熱くなる。

「だから……だからってあんなっ」

「どうして？ わかっていたでしょう。僕が愛しているのは、君です。なのに、君は、知らないふりをして、ガールフレンドだと彼女を私に紹介したのです。それがどれだけ酷い行為か、君にわからなかったとは言わせませんよ」

じわりと、肩を握っている青年の両の手に、力がこめられる。

「まったく。人間とは厄介な存在ですね。認めればすむことを認めたくない駄々をこねたあげく、策を弄して自分で自分を追いつめるなんて」

琥珀のまなざしが、光を弾いた。

「あんただって、人間だろ」

力なくこぼれ落ちたそれは、長く、聞きたくても聞けなかったことである。

まさか、こんな状況で口になることになるだなどと、思ってもいなかった。

そう。はじめて彼、天雲と名乗るこの男と出会った時から、このひとことが胸の中にあった。

それは、おそらくは、天雲が人間であればいいという、漠然とした望みであっただろう。

なぜなら。

理人と天雲とが出会ったのは、去年のことだった。

おばけ屋敷と子供たちの間で気味悪がられていた洋館に、肝試しと称して入り込んだ妹たちを迎えるために行ったのだ。

実は結構怖がりの理人だったが、夕方四時を過ぎても帰ってこない小学生をほっぴらかしにしておくわけにもいかなかった。

四時といえば、小学生の門限にしても、早すぎる感があるだろう。しかし、実のところここ数ヶ月というものは、夏休みというだけではなく、いつにもまして巷は物騒なのだ。

猟奇殺人犯がうろついている。

猟奇殺人。

被害者は、幼稚園から中高校生くらいまで。男女のこだわりはな
いらしい。

被害者の”断片”???それは、指だけだったり頭部丸ごとだっ
たり、足や手と言った具合だったが、あきらかに食い散らかされた
後とわかる歯形つきで転がっている???が、月に二人から三人発
見されるのだ。だから、できるだけ子供たちをひとりで外には出さ
ないようにというのが、教育委員会だけではなく警視庁からの通達
でもあったのだ。が、時は、夏休みである。遊び盛りの子供たちに、
それは、酷というものではある。もともと、妹たちがテリトリーと
しているこのあたりからは、まだ被害者は出てはいない。だから、
見つかったからでは遅いのだとはわかつてはいるのだろうか、住人
達はどこ遠い場所の出来事のように感じ、のんびりと構えていたの
である。

もうじき五時だった。

「よっこらせ」

と、かなり年寄りじみた掛け声をかけて、塀の下に開いている穴を
くぐった。

不法侵入である。が、しかたがないだろう。

肩を竦めた理人は、滴り落ちる汗を拭うのも忘れた。

目の前に、圧倒的な植物の質量が立ちはだかっていたからだ。

庭一面の紅薔薇だった。ひとの背丈を追い抜いた丈高い満開の薔
薇の木々が、からまりあって視界を遮ろうとする。風が立つたびに

ざわりと揺れて、ムツとするほどの香気がたちこめる。

妹たちが通ったのか、枝が折れてトンネル状になっている箇所がある。そこを、あちこち引っかけては薔薇の棘で傷を作りながら通り抜けると、まだ蝉が鳴き交わしている明るい空の下、繁った常緑樹を背景に、赤レンガ造りの洋館が建っていた。壁には、暑さにも負けてしまったのか、かなり強靱な生命力を持っているはずの蔦が褐色の茎や髭根だけとなって微風に揺れている。

黄色くなった芝生。

干上がった泉水。

鎧戸が傾いて今にも落ちそうになっている上げ下げ窓。

あちらこちらと剥落している壁のレンガ。

薔薇の生命力とは、対照的だった。

勝手口らしいドアが開きっぱなしになって、建物の中にわだかまっていた闇を解放している。

「がきんちよどもお……ああ。あそこから入ったな」

唾を飲み込み、理人は、ドアに向かった。

「しつれいしますう………」

心臓がドキドキするし、背中がぞわぞわと敏感になっている。何度も言うが、理人は怖がりなのだ。ゲームでもホラー系は、なるた

け避けているくらいである。内心で、『明里のバカやろう』と毒づいていても、無理からぬことだろう。

息を吸い込んで、『明里』と叫ぼうとした時だった。

「わー」

とか、

「きゃー」

とか、大きな悲鳴が聞こえてきた。

ギクンと、その場で硬直した理人の目の前を、足音高く走り抜けてゆくのは、いずれ見覚えのある六人組の少年少女だった。

「おいっ」

二つに分けて髪をくくっている明里の頭を見つけて、伸ばした手は、

「ヤダッ！ 触らないでよ」

と、悲鳴じみた声とともに叩き落された。

そのまま明里たちは、後ろを見もせずに、逃げていったのだ。

「なんだっつーんだよ」

したたかに叩かれて、ひりりと痛む手の甲をさすりながら独り語

ちる。

手の甲を舐めると、ピリリと唾液が染みた。そうして、鉄臭い匂いが口中に満ちた。

「あつ、くそっ！ 明里のヤツ引っ掻きやがったな」

ぶちぶちと文句を垂れている理人は、自分の背後に危険が迫っていることに気づかなかった。

暗い闇の中、開け放たれたドアからの光にそうとわかる、長い爪の手が、理人の首筋に触れた。

「！」

払いのけようとした手を、ひんやりと冷たい感触が逆に捉えた。

そうして、信じられないような力で引き寄せようとしたのだ。

「うわっ！ よせって！ 離せっ」

理人がじたじたと抵抗する。

闇の中、なぜだか自分を襲っているものがわかった。生臭い息に嘔吐しかけて、寸で堪える。そんなことをしては食われてしまうと、本能が察したのだ。目の前に迫る、かさかさに罅割れた青白い顔。耳まで裂けたようなくちびるの中には、鋭く尖った上下二対の牙が唾液に濡れててらりと光を弾いている。そうして、赤い、ほおずき酸漿の実のような色の、目。

それらは、まさしく、ひとならざるものだった。

今しも剣呑な牙が首筋を、食い破ろうと噛みついた。

「っ！」

あまりの恐怖に、心臓がバクバクと踊りだし、全身の脂汗が、乾ききる。

殺されたくない。

これは、ただの死ではない。

生態系の頂点に立っているはずの人間が、喰られるのだ。

死にたくない。

そう思っても無駄なのだ、鎖のように全身をからめとる猟奇殺人者の力の強さに思い知る。

どう抗っても、逃げられない。

首筋に食い込んでいる牙が、より深くより広く傷口を広げる痛みばかりを感じていた。

目の前が暗くなってゆく。

(もうだめだ………)

せめて“お残し”は、一目でオレだとわかる場所にしてくれ。

指や頭髮とかだけじゃなく、せめて、首から上とか。

いまだに身元不明のままの被害者達を思い出す。

このときの理人は、おそらく、恐怖のあまり現実逃避していたのだ。

なにもかもが、先ほどまでとは違い、リアルに感じられなかった。

だから、

「他人の家で、なにをしているのです」

いつのまにか猟奇殺人犯の背後に立っていたそのひとの、声が、耳に届いた。

それは、現実逃避をしている理人にも、痛いばかりに冷たい声だった。

理人の霞む視界には、白い顔が映っていた。猟奇殺人者とは違い、整った容貌の、男女どちらとも知れない存在に、理人の狂気に陥る寸前だった意識にブレーキがかかった。それと同時に振り向いた猟奇殺人者に引きずられ、首筋の傷が広がる熱い痛みが襲い掛かった。

「あ、あんた、逃げろ」

それは、理人の、このうえなく切実な、忠告だった。

しかし、声の主は、瞳を大きく見開いただけで、逃げるそぶりも見せない。

「あんたっ！」

「ふうん」

歌うような声だった。

「そんなになっても、他人のことが心配できるんですね」

気に入りましたよ。

クスリと、笑ったような気配があった。

それから後の光景は、現実のこととは思えなかった。

きらりと光って闇を裂いたと見たのは、鋭い刃を持ったナイフだった。

ナイフは、あやまたず、猟奇殺人者の喉首を横一線に引き裂いたのだ。

骨と肉の断たれる背筋が逆毛立つような音がした。そうして、ほんの瞬きひとつぶんの間の後に、奇妙な音と悲鳴とがしたと思えば、なまあたかな血が噴出し、理人の全身をしとどに濡らした。

そうして、理人は、いまだに自分を捕まえていた猟奇殺人者が、まるで塵のように崩れて落ちるのを見た。

あまりのことに意識を失いかける寸前に、理人は、白い美貌の主が笑みをそのくちびるに刻みナイフを舐めるのを見たような気がした。

あれから一年になろうとしている。

自分を助けてくれた相手は、天雲と名乗った。

そうして、猟奇殺人者については何の説明もしなかった。

聞きたかったが、聞いてはいけないことのような気がしたのだ。

天雲は、見た目の繊細さとは違い、ふてぶてしいばかりの豪胆さの持ち主らしかった。

いくらこの家が彼のものだとはいえ、この家の台所で、おそらくは猟奇的惨劇は繰り返されていたのだ。すくなくとも、犯人自身の

血で真っ赤になっただろう。

なのに、天雲は、あの日からこの家に住みつづけている。

自分も自分だよなと思わないこともなかった。いくら、助けられたヤツがいるからとはいえ、招かれるたびにここに立ち寄るのだから、図太くなったよなと思わないでもない。

おそらく、あれは、ひとではなかったのだろうが、血を全身に浴びた後、今更なにを怖れることがあるだろう。

あれほど恐ろしかったホラーも、平気で見れるようになった。

遊園地のおぼけ屋敷など、軽いものだ。鼻歌まじりで入って出られる。

どんなにリアルそうに見えても、まがいものでしかないのだと、冷めた部分があった。

天雲とふたりの静かな空間というのも、悪くはない。

ふと気がつけば自分に向けられている琥珀のまなざしが、気にならないこともなかったが。

ひとの目を覗き込むようにして話す天雲であつたので、あまり気にしないようにしていた。

それでも、本当のことを言えば、まさかなと、思わないでもなかったのだ。

琥珀の瞳の奥にある、なにやら圧しひそめたような感情が、もしかして……と。

気づかなかったなんて、嘘だ。

うつすらとはあるが、気づいてはいたのだ。

『好きですよ』

と、からかうような軽い調子でささやいてくる天雲のことだが、恋愛感情のそれなのかもしれないということに。

男同士で好きだと言われても、困る。

気持ち悪いとは思わないが、天雲のことが嫌いじゃないだけに、困るのだ。

だから、逃げた。

前々から好きだと思っていた少女に、玉砕覚悟で告った。

まさかオーケーをもらえるとは思ってもなかったもので、もらった時は、天にも上る心地だった。

そうして、天雲に紹介したのだ。

なぜなら、ガールフレンドができたら、もう、自分のことは諦めるだろう。

そう考えたからだ。

天雲のことを少しも考えない、独りよがりの行動は、結局、ガールフレンドに災厄を呼び寄せる結果になった。

それは、自分の罪だった。

真摯に向かい合おうとせず、逃げようとした、自分の、罪。

そう、ガールフレンドは、死んだのだ。

まるで、一年前のできの悪いカリカチュアのような、無惨なありさまで、殺された。

白い首筋をみごとに切り裂かれ、血を抜かれた少女が発見されたのは、今朝だった。

なぜ、犯人を天雲だと思ったのか。

それは、直感だった。

違ってくれと祈りながら、天雲の家にやってきた。

そうして、問い詰めた理人に、天雲は否定すらしなかった。

遠まわしに、理人の危惧こそが真実だと、肯定しているようにしか見えなかった。

「まったく。人間とは厄介な存在ですね。認めればすむことを認めたくない駄々をこねたあげく、策を弄して自分で自分を追いつめるなんて」

琥珀のまなざしが、光を弾いた。

「あんただって人間だろ」

力ない理人の問いかけに、天雲は、無言のまま微笑んだ。

「!!」

青褪めた理人に向かって、天雲が両手を差し伸べる。

「来てください」

琥珀の瞳が、光を宿す。

琥珀色のまなざしが、とろりとした金色へと変貌を遂げた。

それは、ひとならざる証だった。

金色の瞳に魅せられたように、ゆらりと、理人の上半身がゆらぐ。

理人の鳶色のまなざしから光が失せ、ぼんやりとしたうつけたよ

うなそれが取って代わる。

ゆるゆると焦れるほどゆるやかに差し伸べられた手を握りしめ、
天雲が満面の笑みをたたえた。

「つかまえましたよ。理人くん」

クスクスと、常軌を逸したような冷ややかな笑い声が、天雲の整ったくちびるからこぼれ落ちる。

「君は、もう、私のものだ」

天雲が耳元でささやくと、理人の全身から力が抜けた。

カクン。

天雲の膝の上に、まるで糸の切れた操り人形めいて理人が倒れこむ。

うつ伏せのからだを返し、仰のいた顔にひつついている髪の毛を掻きあげる。

そうして、天雲は、まるで刻印を押すかのように、理人のうつすらと開かれたままのくちびるに朱唇を落とした。

救いを求めるように、理人がもがく。

しかし、それは、一瞬のこと。すぐさま、理人は動かなくなった。

クスクスと、闇の笑う声が、いつまでも、赤いレンガの洋館に響いていた。

(後書き)

内容の割には軽めのコメディな印象を受ける話だと個人的には思っているのですが。

息抜きにアップです。

少しでも楽しんでくださると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0034w/>

捕 獲

2011年8月22日03時32分発行